笑いを科学するⅡ

International Symposium Towards a General Science of Laughter and Humor

painted by MINE OKA

問合せ
関西大学社会学部 (06)6368-1121(代)

2008年5月10日(土) 10:30-17:00

関西大学BIGHALL100

Ⅰ信頼とユーモアの力 ― アトピー治療の現場から
守口敬任会病院アレルギー科部長 木俣肇

Ⅱ何がおかしいの? ― ユーモアの科学的研究
西オンタリオ大学教授 ロッド・マーティン

Ⅲ笑いと脳 ― 認知脳科学の視点から
京都大学大学院教授 苧阪直行

Ⅳワークショップ DLM測定器で測る日本の笑い
金城学院大学教授 森下伸也 関西大学名誉教授 井上宏
関西大学教授 木村洋二 関西大学非常勤講師 森田亜矢子

言祝の儀 関西大学教授 関屋俊彦
司会 安部剛 広崎真弓
討論 雨宮俊彦 野澤孝司 ティル・ワインガートナー

主催:関西大学社会学部+ソシオン研究プロジェクト・ユニット
協賛:吉本興業(株) 後援:日本笑い学会

1. Atopic Dermatitis is cured with Laughter and Trust
Hajime KIMATA, MD, Ph.D, Chief, Department of Allergy, Moriguchi Keijinkai Hospital

2. What's So Funny? : The Scientific Study of Humor
Rod MARTIN, Ph.D, Professor at West Ontario University

3. The cognitive brain science of Humor
Naoyuki OSAKA, Ph.D, Professor at Kyoto University

4. Workshop Measuring Laughter of Japan
Shinya MORISHITA, Hiroshi INOUE, Yohji KIMURA, Ayako MORITA

KYOGEN Toshihiko SEKIYA
Discussions Go ABE, Toshihiko AMEMIYA, Takashi NOZAWA, Till WEINGAERTNER, Mayumi HIROSAKI

Presented by Faculty of Sociology & Socion Research Project Unit KANSAI UNIVERSITY
socion@ipcku.kansai-u.ac.jp http://www2.ipcku.kansai-u.ac.jp/~ socion/

笑う動物はヒトだけである。この事実は、笑いの謎を解くことがヒトの秘密を解くことにつながることを暗示する。しかし、笑いの謎は、いまだ解かれていない。ヒトはなぜ笑うのか、笑いはどのような意味を、働きをもつのか、すべてのヒトが口を開けて笑うにもかかわらず、その謎はまだ閉ざされたままである。人類進化の鍵をにぎるこの笑いは、精神と身体、こころとからだの結び目にあって、かくれたヘソのように、マジメな人間科学（Human Science）の探求の目を逃れている。笑いは、つまらない不真面目な現象であり、真剣な科学の対象には値しない、とおおくの真面目な人たちが考えてきた。しかし、その真面目な科学者や求道者が、正義のイデオロギーをふりかざして走りまわり、たくさんの人を殺して歩いたのが20世紀の現実である。その屍の上に、あるいは隣りに、ともかくも飢えと暴力から解放された豊かな社会が実現した。その恵まれた場所で、私たちは、生きる意味を見失い、空虚と退屈をかこち、欲望の檻のなかで愛の幻影につつまれて蠢いている。いずれ訪れる自己の死すらも直視できないほどに、腐敗は深部に進行した。今、このあり様をみて笑わずにいることができる人間は不真面目である。笑いは、真摯に生きることと対立しない。笑いは、意味がナイことをおかしみに変えてしまう不思議な演算子である。このゼロの演算子“aH”が、リアリティとのスキマを生み出し、メタ次元からヒトの可能なあり方を洞察すること（Aha!）を助ける。地上の楽園は、山のあなた、海のかなた、遠いみちた場所にあるのではない。笑いによって原点（=0）の扉が開かれたとき、ヒトは意味世界の幽閉を脱し、欲望の呪縛を解かれて、「いまここ」に躍動するゆたかな「無」（久松真一）のなかに解放されるだろう。今、人類に必要なもの、それはみずからの愚行を直視して、“aH!”（アッハ）と跳躍する笑いの馬鹿力である。ゼロの笑いは、「世界」を再起動(restart)する。笑いは、ゆかいな自己認識の運動であり、愚かさの自覚であり、知の希望であり、最高の哲学である。古代の日本人は、笑いが神の化身であること、神がそれであったところのエネルギーが余剰となって溢れ出したものであることを熟知していた。「古事記」の神話によれば、岩穴に隠れた太陽神アマテラスを引き戻したのは、ひとりの勇敢な女神のストリップである。アメノウズメの裸踊りによって誘発された神々の大笑いが、この世にふたたび太陽神を呼び戻したのである（「天の岩戸開き」）。私たちは、このようなゆかいな神話をもつ文明を愛する。草薙の剣が収められているとされる日本最古の神社のひとつ熱田神宮には、暗闇で生み出した「笑い」を神聖な木箱に封入して奉納する不思議な儀式が伝えられている。「酔笑人」神事とよばれるこの秘儀は、笑いによって生まれる余剰エネルギーを、神がそれであるだろうところの力として、未来に向けて祀る希望の儀礼と解することができる。しかし、それは秘儀として秘匿されなければならない。なぜなら、笑いは0の演算子であり、すべてを無に帰す破壊者でもあるからだ。いま、時は満ちた。情報テクノロジー革命は、「神のもうひとつの姿」である笑いの本体を、科学の目で明晰に捉える可能性を静かに準備していた。もちろん、そのことに気がついた人はまだ少数である。私たちは四半世紀まえ、世界に先駆けて「笑いの統一理論」を発表した。仮説によれば、笑いとは、1）図式作動の振動を契機に（=ズレて）、2）負荷を脱離して図式駆動を停止する防衛メカニズムであり（=ハズレて）、3）これは、図式への備給（cathexis）を撤収して図式のリアリティを無化するとともに（=ヌケて）、4）余剰化した予期ポテンシャルを「おかしみ」とともに呼吸運動系へ放出する（=アフレる）ところの現象である。私たちはいま、この笑えない仮説に導かれて、おかしみの笑いによって横隔膜に発生する特有の微細振動を、皮膚表面から電気的に観測・解析する「笑い測定システム」（DLMS:Diaphragmatic Laughter Measuring System）の試作に成功した。これまで笑いは、笑顔と笑い声に表れると信じられてきた。しかし、顔は「愛想笑い」を浮かべ、声は「空笑い」を笑うことができる。これに対し、横隔膜は人を裏切らない。「負荷脱離」によって発生した笑いの余剰出力は、一次的に横隔膜呼吸系に投射されているらしい。窺い知ることのできなかった「腹の内」を、横隔膜の動きから客観的なデータとして採取することができれば、「DLM笑い測定機（Laughogram）」は、21世紀の人間科学にパラダイム転換を引き起こす、ちょっとクールなツールとなるかもしれない。私たちは、この日本から全世界に向けて、愉快でマジメな笑いの科学研究、プロジェクト“aH”（Project-aH）を提案する。“aH”は、「ゆたかな無」を測る単位である。 プロジェクト“aH”は、ヒトの進化を、充ちた「意味」ではなく、愉快な「無意味」の方から解明する。笑いの科学は、愚かさや間違いを糾弾する正義の知ではない。“aH”プロジェクトは、エネルギーの解放（“aH”）と自己洞察（“aha!”）をふくむ愉快な科学（“aH”-science）をめざす。笑いの謎を解明することは、21世紀人間科学最大の課題のひとつである。まずは、文学、哲学、心理学、社会学、医学その他の伝統的な学問分野におけるユーモアの研究に加えて、脳神経科学、コンピューター・情報科学、分子免疫学といった先端分野を総動員し、学際的な笑い研究プロジェクトをスタートさせよう。笑いのメカニズムとその働きが、科学的に解明されたとき、人類は“aH”の力、「偉大な無」の力を手に、あたらしい進化の道を歩みはじめるにちがいない。“aH”プロジェクトは、笑いの力を借りて、意味世界の原点をくぐり抜け、「ゆたかな無」の躍動する自由空間へ脱出する人間科学の冒険であり、日本から世界へ科学の名において発せられる「天の岩戸開き」の試みである。21世紀が笑いとユーモアの世紀となるよう、日本の知力と技術力の総力をあげて、笑いを愛するすべてのヒトとともに、人類史にゆかいな余白の1ページを開こうではないか。

平成20年4月1日　関西大学社会学部教授　木村洋二